

北野 忠さん

(東海大学教養学部人間環境学科教授)

ゲンゴロウを通し、自然との向き合い方を考える

国内で確認されているゲンゴロウ類のうち、約四割が絶滅の危機に瀕しているのを、ご存じだろうか。農業離れや外来生物の影響など、原因はさまざま。幼い頃から水辺の生きものを楽しみ、ゲンゴロウの保全に取り組む北野忠さんに、その背景や保全の意味、環境との向き合い方について聞いた。

減り続ける水辺の昆虫

——北野先生の研究内容について教えてください。

学生時代は、飼育を通して、魚類の繁殖生態について研究していました。東海大学の教員になった今もそれに関する研究を続けてはいますが、現在はゲンゴロウをはじめとする水生昆虫を主な対象として、国内各地の生息状況の変化やその要因を調べたり、飼育下で繁殖させて生活史を明らかにしたりといった研究が主になっています。このほか、学生とともに絶滅に瀕し

た水生昆虫の保全を実践しています。主なフィールドは神奈川県の大学周辺（平塚市・秦野市）と、故郷の浜松がある静岡県、また十年ほど前からは南西諸島にも足しげく通うようになりました。

国内では約一五〇種のゲンゴロウ類が確認されていて、環境省のレッドリスト（*注）によれば、そのうちの六〇種ほどが絶滅の危機に瀕しているといわれています。こうした水生昆虫の減少は現在も続いています。たとえば故郷の浜松市には、全国的にみても希少なゲンゴロウ類が何種も生息していた池があり、私は二十年以上も前からそこに通っていますが、いくつかの種

は、いまはまったく見られなくなってしまいました。南西諸島においても水生昆虫の減少は顕著で、島ごとでみれば絶滅してしまったと考えられる種は数えきれないほどです。それどころか、いまではどの島からもまったく見つからず、国内では絶滅した可能性の高いような種も出ています。

このように現場での継続的な調査・観察を続けてい

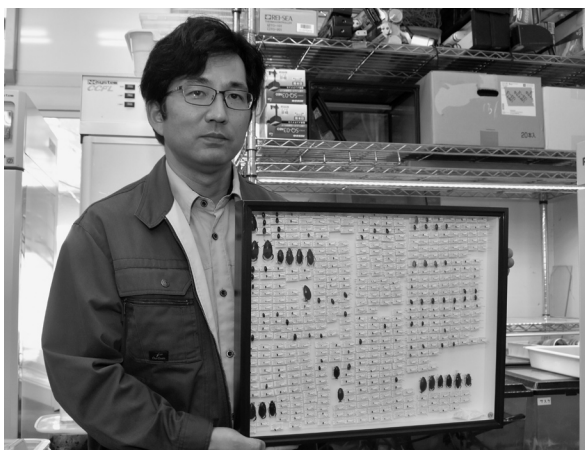
ると、そこにすむ生き物たちの種や個体数の変化が見えてきます。その原因を明らかにし、排除できれば、絶滅の危機に瀕した生きものの保全にもつなげることができるようになります。

ゲンゴロウは身近な存在

——ゲンゴロウの調査や保全を始めたきっかけは？

幼いころから生きものが何でも好きで、なかでも魚やエビカニといった水辺の生きものに興味があったため、東海大学の海洋学部水産学科に進学したんですが、その後、なぜゲンゴロウの保全を始めたのかというとうーん……簡潔にお話しするのは難しいですね。

そもそもゲンゴロウに魅かれた理由について話すだけでも長くなってしまっていますが、まず、ゲンゴロウ類の多くは人里の水辺に依存して生活しているんです。たとえば以前、東海大学沖縄地域研究センターがある西表島（いりおもて）にどんなゲンゴロウ類がいるのかを調べ、「田んぼやため池といった人工的な湿地」と、「山の中に自然にできた水たまりや沢水などの自然湿地」とに分けてリスト化したことがあるのですが、人工的な湿



●きたの・ただし 1972年静岡県生まれ。東海大学大学院海洋学研究所博士課程後期満期退学。博士（水産学）。監修した本に『ゲンゴロウ・ガムシ・ミズスマシハンドブック』、共著に『日本の水生昆虫』（共に文一総合出版）がある。写真で手にしているのは、これまでの調査で北野さんが採集したゲンゴロウ類の標本。こうした標本は、いつどこにどの種がいたのかを証明する重要な証拠となる。

*レッドリスト……野生生物を絶滅の危険性の度合いごとにランク付けし、リスト化したもの